

『ドイツ語文化圏研究』 第 11 号 抜刷
2014 年 12 月 20 日発行

終助詞はどのように訳されているか

— 山田太一のファンタジー三部作のドイツ語訳を手がかりに —

Wie übersetzt man japanische Satzendpartikel ins

Deutsche?

— Anhand einer Gegenüberstellung von Yamada Taichis
phantastischer Trilogie mit der deutschen Übersetzung —

宮内 伸子

MIYAUCHI, Nobuko

日本独文学会北陸支部

終助詞はどのように訳されているか

—山田太一のファンタジー三部作のドイツ語訳を手がかりに—¹

宮内 伸子

1. はじめに

自然な日本語の会話には終助詞の使用が不可欠である。そのような終助詞を伴った日本語表現が、終助詞に直接対応する語を持たないドイツ語や英語などの言語に翻訳される場合、どのように処理されているのだろうか。本稿ではそれについて、山田太一²の作品を素材として考察を試みる。山田作品を用いたのは、この作家が数々のヒット作を生み出した、テレビドラマの脚本家³であることが一つの大きな理由である。つまり、山田の書く会話は、終助詞も含めて自然な感じのものになっているだろうと考えてのことである。

本稿では、山田の小説作品の中から『飛ぶ夢をしばらく見ない』(1985年)、『異人たちとの夏』(1987年)、『遠くの声を探して』(1989年)のファンタジー三部作を考察対象として選んだ。理由は、この三作のドイツ語版が近年次々と刊行されたこと、また参考として参照する英語訳もそろっていたからである。『ふぞろいの林檎たち』などのテレビドラマの脚本は、残念ながら現在までのところ外国語に翻訳されていない。

¹ 本稿は日本独文学会北陸支部研究発表会(2013年11月9日、於：富山)での口頭発表「終助詞はどのように訳されているか — 山田太一のファンタジー三部作のドイツ語訳を手がかりに —」に修正を加えまとめたものである。

² 1934年、東京浅草生れ。大学卒業後、松竹大船撮影所演出部に入り、木下恵介の下で助監督を務める。1965年独立、テレビドラマの脚本家となる。代表作は『男たちの旅路』『岸辺のアルバム』『ふぞろいの林檎たち』など。『日本の面影：ラフカディオ・ハーンの世界』で向田邦子賞受賞。小説も執筆し、『異人たちとの夏』で山本周五郎賞受賞。

³ 山田が脚本を手がけた『男たちの旅路』(1976-82年、NHK)、『岸辺のアルバム』(1977年、TBS)、『ふぞろいの林檎たち』(1983年、TBS、シリーズ第4作は1997年)は、1970年代後半から80年代にかけてテレビで放映され人気を博した。

山田は作品の主人公に、現実不適応に陥った人物を据えることが多いが、この三作もそろってそのような人物が主人公である。『飛ぶ夢をしばらく見ない』と『異人たちとの夏』は人生の先が見えた中年男性、『遠くの声を探して』の場合はまだ二十代後半の男性だが、三名ともそれぞれに悩みをかかえる中、夢か現かという不思議な体験をする。いずれの作品も、その不思議な体験が、会話の多いスタイルで描かれている。

本稿ではまず、「共同注意」という認知言語学の観点から近年説明されるようになってきた終助詞「ね」と「よ」について、『異人たちとの夏』における親子——といっても、子の方が物語の主人公である中年男性、親はすでに亡くなっていて幽霊として登場するのだが——その親子の会話を例に、どのようにドイツ語に訳されているかを見ていく。

次に、終助詞を伴わない発話のニュアンスについて、『遠くの声を探して』の主人公恒夫と、どこからか聞こえてくる「声だけの女」の対話とそのドイツ語訳を観察する。

その次に三番目として、終助詞による人物像の造形機能、つまり登場人物のいわゆる「キャラを立てる」働きについて検討する。『飛ぶ夢をしばらく見ない』のヒロイン睦子の人物像が、せりふ中の終助詞の訳が容易でないとすると、どういう代替手段によって表現されているのか。主人公田浦の妻の場合と比較しつつ、示していきたい。

そして最後に、以上の三方向からの調査結果をまとめ、終助詞の翻訳について考察を試みる。

2. 「共同注意」の観点から終助詞「ね」と「よ」の訳し方について---『異人たちとの夏』の親子の会話を例に

山田敏弘は『日本語のしくみ』の中で以下のように述べている。

英語で文の最後につける aren't you? や isn't it?, それに対応するフランス語の n'est-ce pas? も、知っていることを確認する用法をもっていますが、「ね」とまったく同じというわけではありません。(中略)「よ」は、日本語から英語など外国語への翻訳では訳されません。(中略)英語で

は「よ」に当たることばはありません。⁴

「ね」や「よ」で日本語話者はいったい何を伝えているのだろうか。近年、「日本語話者は共同で話す」という指摘がしばしばされるようになってきた。⁵ 「ね」や「よ」といった終助詞は、「共同で話す」際に大きな働きをするが、認知言語学ではこれについて「共同注意」という観点から説明を試みている。

共同注意とは、「他者が注意を向けている対象に自分自身が注意を向けること」、また、「自分自身が注意を向けているものに他者の注意を向けさせること」である。⁶ 「ね」と「よ」ではこの共同注意への関わり方が少し異なり、「ね」は聞き手の注意に対し追隨的で、共同注意を求めたり確認したりするのに対し、「よ」の方は聞き手の注意に対し誘導的で、共同注意を促すとされる。⁷

さて、『異人たちとの夏』の第13章は、その大半が親子の会話から成っている。本稿では、この親子の会話における終助詞「ね」と「よ」を調査対象とした。出現総数は、「ね」で終わる発話が14例、「よ」で終わる発話が39例であった。

2.1. 「ね」

まず、和独辞書において終助詞「ね」にどのようなドイツ語が当てられているのか見ておこう。『アクセス和独辞典』、『郁文堂和独辞典』、『現代和独辞典』、『新コンサイス和独辞典』、『和独大辞典』およびインターネット上の和独辞書『wadoku』⁸ を参照したところ、以下のような訳語が挙げられていた。⁹ ほぼすべてが聞き手への念押し疑問形になっているのが目につく。

⁴ 山田（2009）：106-107頁。山田は「よ」は外国語へは翻訳されないと断言しているが、本稿では「よ」のもつニュアンスは何らかの代替手段で表現されているはずとの立場で論を進める。

⁵ 池上/守屋（2009）など。

⁶ 近藤/姫野（2012）：14頁。

⁷ 近藤/姫野（2012）：219-222頁、大藪（2012）：50頁。

⁸ <http://www.wadoku.de/>

⁹ リストに挙げた訳語は、各辞書の例文中で用いられている語も含めて一覧にしてある。

『アクセス和独辞典』 nicht wahr?/ was? / wie?

『郁文堂和独辞典』 doch/ nicht wahr?

『現代和独辞典』 wie?/ nicht wahr?/ gelt?/ gell?/ was?/ nicht?/ ne?/ oder?/
doch/ ja?

『新コンサイス和独辞典』 nicht wahr?/ nicht?/ gelt?/ was?/ (「ねえ」: weißt
du was?/ wissen Sie was?)

『和独大辞典』 nicht wahr?/ nicht?/ ja?/ das weißt du doch!

『wadoku』 nicht wahr?/ finden Sie nicht auch?

和独辞書で紹介されているこのような訳語が、山田作品の翻訳の際にも使われているのだろうか。結論を先に言うなら、このような訳語はほとんど使われていなかった。では、「ね」はどのように訳されているのか。

『異人たちとの夏』の親子の会話からこれから訳例を紹介していくが、上で記したように「ね」の出現数は14例あり、うち8例が母親の発話、5例が息子の発話、父親の発話は1例のみであった。用いられていた翻訳方法を以下の三種に分けてみた。これはつまり、共同注意を求めたり、それを確認したりする終助詞「ね」の働きが、どのような手段で代替されているかの分類ともいえるだろう。

- a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる
- b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む
- c) 共同注意態勢にあることを明確に示す文言を用いる

訳例の内訳を示すと、a) が4例、b) が2例、c) が5例、それ以外が4例であった。¹⁰

a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる

和独辞書の「ね」の訳語の中に doch が挙げられているが、その doch 等を用いて、聞き手への共同注意の求めや確認の気持ちを表現していると思われる訳が14例中4例あった。

¹⁰ 合計が15になるのは、a) と b) を併用している例があるためである。

(1) 「やっぱりねえ」と母が淋しい声を出した。「このままやっ行ってけるわけはないと思っていたのよ」(原作 162 頁)

»Also doch.« Meine Mutter klang traurig. »Ich habe ja nicht geglaubt, dass es lange so weitergehen würde.« (ドイツ語訳 S.143)

“I have to admit,” my mother sighed, her voice filled with sadness, “I had a feeling this couldn’t go on forever.” (英語訳 p.154)

(1) は息子である「私」が両親に向かって、もう会いに来られないと告げたのに対する母親の反応である。聞き手への同意が、doch によって強調されている。

(2) 「よくそんな顔してられるわね」(168 頁)

»Wie kannst du nur so vergnügt sein?« (S.148)

“How can you sit there acting so gay?” (p.160)

(2) はお別れの食事をするために親子三人ですき焼き屋に行った際に、父親が店の仲居を相手に軽口を叩いたのをとがめる母親のせりふである。「ね」に込められた、共同注意から逃さないぞとばかりのなじる口調を nur で対応させていると思われる。

(3) 「子供ってもんは、なんとかやっつくもんなんだね」(171 頁)

»Letzten Endes schlägt sich ein Kind doch irgendwie allein durch«, fuhr meine Mutter fort. (S.150)

“I guess children find a way to muddle through one way or another even when their parents aren’t there.” (p.162)

(3) は doch という心態詞で「ね」に対応させている。英語訳は I guess を用いて、話し手の一方的な宣言や断言ではなく、聞き手の反応を顧慮しているニュアンスを出している。

b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む

原文では明示されていない主語を、wir を用いて訳すことで、聞き手を共同注意態勢に巻き込むという対応が全 14 例のうち 2 例に見られた。この方針は「よ」の翻訳の際にも使われている。

(4) 「冷やして売ってたもんだから」/ 「それじゃ、すぐ食べようかね」と母が立上って台所へ来る。(156 頁)

»Ich habe extra eine genommen, die schon gekühlt ist.« / »Dann können wir sie ja gleich essen.« Meine Mutter stand auf und kam in die Küche. (S.138)
“It’s already chilled,” I said as I stepped out of my shoes. “They had them on ice.” / “In that case, maybe we should eat it right away.” My mother got to her feet and came into the kitchen. (p.149)

(4) は息子が手土産の西瓜を母親に差し出す場面である。主語を wir とし、また ja という心態詞も併用して、聞き手に対し共同注意を求め確認しているニュアンスを出している。

(5) 「肉も野菜も、どんどん追加するからね」(166 頁)

»Wir können beliebig viel Fleisch und Gemüse nachbestellen.« (S.146)
“And we’ll be ordering lots more meat and vegetables as we go.” (p.158)

(5) はすき焼き屋で、息子が両親に向かって言うせりふである。「追加する」のは厳密には息子であるが、wir を主語にして訳すことで、話し手が一方的に追加注文という行為をするのではなく、聞き手も巻き込んだ間主観的な発話態度が的確に表現されている。

c) 共同注意態勢にあることを明確に示す文言を用いる

心態詞を用いる、あるいは wir という複数一人称を主語にするといった方法で対応できない場合でも、共同注意態勢にあることを明確に示すようなド

イツ語文にすることで、「ね」のニュアンスを反映させようとしている例がかなり見られた。14例のうち5例がここに分類できる。

(6) 「いま人形焼売ってたな。一袋、買ってくるか」 / 「いいね。先行ってていいよ。すぐ追いつくから」 (164 頁)

»War da nicht eben eine Ningyoyaki-Bude? Ich hole eine Tüte.« / »Gute Idee. Ich hole sie. Geht ihr schon mal weiter, ich komme gleich nach.« (S.144)

“They were selling figurine cakes back there. How about we get ourselves a bag?” / “Sure. You guys keep walking. I’ll catch up in a minute.” (p.156)

(7) 「私たちなしで、よく三十六年もやって来たね」 (171 頁)

»Du warst sehr tapfer. Die ganzen sechsunddreißig Jahre bist du ohne uns zurechtgekommen.« (S.150)

“I can’t get over how you managed all by yourself for 36 years,” (p.162)

(6) はすき焼き屋に向かう途上での、父と息子の会話である。父親が人形焼きを買おうと提案したのに対し、息子が「いいね」と賛意を示している。その「いいね」が *Gute Idee* と訳されている。(7) は母親の発話だが、原文では「よくやって来たね」のみで具体的内容は言外に表現されているが、ドイツ語訳では *Du warst sehr tapfer* と言語化されている。英語訳でも相手への称賛の気持ちと言語化されている。この二つの例では、聞き手が注意を向けている対象 ((6) の場合は、人形焼きを買うこと、(7) の場合は、ここで話題になっている十二歳で両親に死なれた息子の成長振りのこと) に、話し手も注意を向けたことを積極的に示す追隨的な発言をすることで、共同注意の成立を示し、「ね」の機能を代替させていると考えられる。

(8) 「大体、すき焼きの季節じゃねえよ。ここで、なんか食べりゃあいいじゃねえか」 / 「そうですね。そうしましょう。一度、三人で鍋かこむっていうの、いいなって思ったんです」 (158 頁)

»Eigentlich haben wir nicht die richtige Jahreszeit für Sukiyaki. Na ja, machen wir's halt hier«, sagte mein Vater. / »Ja, gute Idee! Ich habe mir eben gedacht, es wäre schön, wenn wir drei einmal gemütlich zusammensitzen könnten, vor uns den Sukiyaki-Topf.« (S.139)

“It's not exactly that season for sukiyaki anyway,” my father said. “We can eat something here.” / Yes, let's do that,” I agreed. (p.151)

(8) は(6)と同じく父親と息子のやり取りである。すき焼きを食べに行こうと息子が誘ったのに、家で食べればよいと父親は答える。その答えを聞いて、息子が「そうですね」と聞き手(父親)に追隨的に答える場面である。その追隨的な様子が Ja, gute Idee! という文言でよく表現されているのではないだろうか。

(9) 「一串ずつ食おうじゃねえか」と父が立止まった。 / その声で三人でアパートからずっと黙って歩いてきたことに気づいた。 / 「いいね」と私ははずんでいった。(163頁)

Mein Vater blieb stehen. »Ein Spieß für jeden von uns?«, fragte er. / Da erst merkte ich, dass wir unterwegs kein Wort miteinander geredet hatten. / »Q ja«, stimmte ich freudig zu. (S.143f.)

“Let's each have one of those,” my father said, halting his steps. / Hearing him speak made me realize none of us had uttered a word since leaving the apartment. / “Sounds good to me,” I said, putting a little extra bounce in my voice. (p.155)

(9) もまた父親の提案に対して息子が賛意を示す場面である。ドイツ語訳は O (オー) という間投詞を ja に伴わせて気持ちを込め、英語訳も積極的に共同注意態勢にあることを示すような表現になっている。

(10) 「四十八だなんて驚いちゃうよ」と母は私を見つめる。 / 「そうだね」と私はいった。「ぼくの方は、お母さんが若くて綺麗で嬉しかったよ」

(170-171 頁)

»Ich kann noch immer nicht fassen, dass du schon achtundvierzig bist.«
Meine Mutter starrte mich an. / »Ja, kaum zu glauben.«, antwortete ich.
»Ich dagegen bin glücklich, dass du so jung und hübsch bist.« (S.150)
“I still can't believe you're 48 years old!” / “I know what you mean.” I
nodded. “For my part, I was thrilled to see you so young and pretty.”
(p.162)

(10) のやり取りは「よ」の例と「ね」の例が交互に出てくるので、両者の「追隨的」と「誘導的」の差がよくわかるのではないだろうか。「驚いちゃうよ」と息子の四十八という年齢に注意を向けさせようとする母親の発話に対して、「そうだね」と息子が答えている。その「そうだね」が *Ja, kaum zu glauben.* と、聞き手に対してははっきりと追隨的な文言に訳されている。英語訳の表現もまさに追隨的といえるのではないだろうか。

以上、「ね」の訳例を三種に分けて紹介してきたが、いずれの種類にも分類できないものが4例あった。例えば下の(11)のようなもので、特に訳さず文脈にまかせている。ちなみに英語訳は、*I don't know* でニュアンスを伝えている。

(11) 「冷房がないと、鍋はねえ」(158 頁)

»Ohne Klimaanlage ist es zu heiß für Sukiyaki.« (S.140)

“I don't know about doing a hot-pot here, without air conditioning.” (p.151)

2.2. 「よ」

終助詞「よ」と「ね」はどちらも使えるケースも多いが、上でも述べたように共同注意を働きかける態度において、「よ」の方が積極的であり、そのため響きが強い。場合によっては少し強引な感じや押しつけがましい印象にもつながり、それはまたざつくばらんな口調の特徴ともいえる。女性より男性の発言になじみ、山の手風というより下町風の口調をイメージさせる。

『異人たちとの夏』の主人公「私」の両親は東京の下町浅草の住人という設定で、それを反映するかのよう、母親の口ぶりも気取りがなく、親子の会話においても「よ」が「ね」よりもかなり多く使われている。

訳例の紹介に入る前に、「よ」についても和独辞書の説明や訳語を見ておきたい。とはいえ、「よ」という見出し語をそもそも持たない和独辞書も多く、「ね」よりもさらにケースバイケースでの対応が必要であるようだ。

『アクセス和独辞典』見出し語なし

『郁文堂和独辞典』見出し語なし

『現代和独辞典』sicher/ gewiss/ doch

『新コンサイス和独辞典』見出し語なし

『和独大辞典』ja/ sicher

『wadoku』Satzschlusspartikel zur Verstärkung einer Aussage

すでに述べたように、『異人たちとの夏』第13章における「よ」の出現数は39例であった。内訳は父、母、息子の発話がそれぞれ13で、ちょうど三分の一ずつである。以下、「よ」の翻訳例を三種に分類して紹介していく。これはすなわち、終助詞「よ」の持つ共同注意への誘導という機能をどのようドイツ語で表現しているかの分類でもある。

- a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる
- b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む
- c) 命令文にする

訳例の内訳を示すと、a) が16例、b) が3例、c) が8例、それ以外が12例であった。

a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる

心態詞などを添えて表現を強めるという手段で、「よ」のもつニュアンスを出そうとしたと考えられる例が最も多く、16例あった。そこから3例紹介する。

(12) 「四十八だなんて驚いちゃうよ」(170 頁)

»Ich kann noch immer nicht fassen, dass du schon achtundvierzig bist.«
(S.150)

“I still can’t believe you’re 48 years old!” (p.162)

(13) 「途中からは女房がいるよ」と父がいう。(171 頁)

»Immerhin hatte er ja auch eine Frau«, sagte mein Vater. (S.150)

“Don’t forget, he did have a wife for a good while,” my father pointed out.
(p.162)

(14) 「あんたをね」と母がいった。「自慢に思ってるよ」(173 頁)

»Wir sind sehr stolz auf dich«, fügte meine Mutter hinzu. (S.152)

“We’re so proud of you,” my mother said. (p.164)

(12) は noch immer で否定の nicht を強め、(13) は ja で文意を強め、(14) は sehr で stolz を強調している。以上の三例は、心態詞などで表現を強める対応をとって、「よ」の持つ共同注意の促しのニュアンスを表現しているとまとめられるだろう。表現を強める語としては他に、aber, denn, nur, so, sicher が使われていた。

b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む

「ね」の場合にも、すでに紹介したように、原文では明示されていない主語を wir にすることで聞き手を共同注意態勢に巻き込む訳例が見られたが、「ね」「よ」双方とも使用可能な文脈が稀ではないことを想起するなら、「よ」にも同じ対応がされる場合があっても不思議はないだろう。3 例あった。

(15) 「大体、すき焼きの季節じゃねえよ。ここで、なんか食べりゃあいいじゃねえか」(158 頁)

»Eigentlich haben wir nicht die richtige Jahreszeit für Sukiyaki. Na ja, machen wir’s halt hier«, sagte mein Vater. (S.139)

“It’s not exactly that season for sukiyaki anyway,” my father said. “We can eat something here.” (p.151)

(15) は、息子に親子三人ですき焼き屋に行こうと誘われて、父親が断る場面である。wir を主語にすることで聞き手（息子）を共同注意へと促している。

(16) 「今頃なにいい出すんだよ。昨日買って来たのがあるだろうが」 / 「お昼使っちゃったもの。納豆ならあるけど」 / 「そんな夕飯、英雄に食わして、どうすんだよ？」 (159-160 頁)

»Zum Einkaufen ist es wohl zu spät. Du hast doch gestern erst eingekauft, oder? « / »Das haben wir schon zu Mittag gegessen. Jetzt haben wir nur noch Natto – vergorene Sojabohnen.« / »Das können wir Hideo nicht anbieten.« (S.141)

“It’s kinda late to be thinking of that now, don’t you think? Just throw something together from yesterday’s leftovers.” / “That’s all gone. We had it for lunch, remember? Except for some fermented soybeans.” / “Don’t be ridiculous. We can’t serve Hideo a dinner like that.” (p.152)

(16) は訪ねてきた息子にご馳走をしようとしたものの、納豆しか残っていないと母親（妻）言われた父親（夫）の発話である。「どうすんだよ」と聞き手（妻）に共同注意を促すくだりが wir を主語にした文で訳されている。英語訳も同様の方法を取っている。

(17) 「無理にはしゃぐこともないけど、お父さんの気持ちだって分るし、仲良くのもうよ」 (168 頁)

»Wir müssen nicht gezwungen lustig tun, aber ich kann Vater verstehen. Lasst uns in Ruhe zusammen trinken.« (S.148)

“There’s no reason you should have to force yourself to be cheerful, but I can understand how Dad feels, too, so how about we put away the barbs and

drink up.” (p.160)

(17) は、すき焼き屋の仲居に軽口を叩く父親を母が非難するのを聞いて、息子がたしなめて言うことばである。聞き手（母親）を含めて wir（ただし、ここでは四格の uns）とすることで当該行為へ聞き手を巻き込み、共同注意へと誘導しているといえるのではないか。英語訳も同様の対応をしている。

c) 命令文にする

「よ」が「ね」と大きく異なるのは、動詞の命令形に直接接続できる点である。そこで原文が「よ」で終わる命令文の場合、そのまま強い口調の命令文にして訳すことで、「よ」のニュアンスを出すことができる。この方法による訳例は心態詞等の利用に次いで多く、8例見られた。

(18) 「だったら栄養とろうってえのに文句いうんじゃねえよ」(167頁)

»Dann halt den Mund. Er muss sich stärken.« (S.147)

“Then stop giving him a hard time when he's only trying to build up his strength.” (p.159)

(19) その仲居の方へ顎を出して、「帰る時、一枚でいいから、やっとけよ」と父はチップのことをいう。(170頁)

»Gib ihr was, wenn wir gehen«, sagte mein Vater und wies mit dem Kinn auf die Kellnerin. Er meinte ein Trinkgeld. (S.149)

My father pointed after her with his chin. “Be sure to drop a bill on her on the way out”, he said. (p.161)

(18) と (19) は、「よ」が動詞の命令形に直接接続している原文を、強い命令口調でのドイツ語にして対応しているケースである。英語訳も同様に、命令文で対応させている。

(20) 「ぼくより、お父さんとお母さんに食べて貰いたいよ」(167頁)

»Nein, ihr sollt essen. Nicht ich.« (S.147)

“I want you guys to eat to your heart's content.” (p.159)

(20) は本来の命令形ではないが、助動詞 *sollen* を用いて、聞き手への強い指示感が伝わるドイツ語になっている。

なお、以上の a) b) c) のいずれにも分類できない訳例が 12 例あったが、その大部分は特に訳さずに文脈にまかせるという対応であった。

2.3. I think/ I guess/ you know などを用いる英語訳の対応について

本稿は原作とドイツ語訳の対照を趣旨とし、英語訳は参考までに参照するという位置づけであるが、終助詞「ね」と「よ」の翻訳に関してドイツ語訳とは異なる英語訳の対応で特徴的に思われるものがあったのでそれを紹介しておきたい。

(21) 「暑いねえ。首の周り、汗もが出来そうだよ」と母は、手を洗い始める。(156 頁)

»Wirklich heiß heute. Da bekommt man fast einen Hitzeausschlag«, meinte Mutter und wusch sich die Hände. (S.138)

“Quite a heat wave we’re having,” my mother said as she turned the faucet to wash her hands. “I think I’m getting a rash around my neck.” (pp.149-150)

(22) 「行こうじゃないか」/「どこへ?」/思わず私は顔を上げて父を見た。/「どこって、すき焼きだよ。真夏に冷房で、しっかりすき焼き食おうじゃねえか」(162 頁)

»Wollen wir gehen?«, sagte mein Vater. / »Wohin?« Unwillkürlich hob ich den Kopf und sah ihn an. / »Ins Restaurant. Wir essen im Sommer in einem klimatisierten Lokal viel, viel Sukiyaki. Was haltet ihr davon?« (S.143)

“Wahdda ya say we go after all?” my father suddenly perked up. / “Excuse

me?" I lifted my head in surprise at the change in his tone. / "You know, for sukiyaki. Who cares if it's the middle of the summer? If we go to a restaurant, we can stuff ourselves with sukiyaki in air-conditioned comfort." (pp.154-155)

(23)「してるよう。気のきいた連中はちゃんとやってんだよ。(後略)」(170 頁)

»Doch, doch. Ein Mann von Welt gibt immer Trinkgeld. (...)« (S.149)

"Sure they do. Some people still like to show their appreciation, you know. (...)" (p.162)

(21) (22) (23)は英語訳で目につく、I think/ I guess/ you know 等を用いた訳例である。これらの表現を使うことで、宣言的断言を避けて聞き手の反応を顧慮し、共同注意を促す姿勢を示しているのではないだろうか。上の三つの訳例はすべて「よ」に対するものだが、「ね」の場合もこのような方法が取られている場合がある。(3)と(11)の例文を参照されたい。「よ」についても、(13)と(16)の英語訳も再度見ていただけたらと思う。英語訳でこのストラテジーが活用されている分、逆にドイツ語で ich glaube や weißt du was? などがあまり使われていないことが目を引く。

以上、共同注意という観点から終助詞「ね」と「よ」のドイツ語訳を見てきたが、次に終助詞が見つからない場合の日本語表現について、翻訳での対応を見ていこう。

3. 終助詞を欠く表現がもつニュアンスについて---『遠くの声を探して』の「声だけの女」との対話を例に

日本語の会話は、先にも述べたように、話し手と聞き手が共同で話す傾向が強く認められる。終助詞は共同注意を呼び起こす大切な手段であり、つけることが義務的である場面も少なからずある。例えば、「よいお天気です」「はい、そうです」というやり取りはとても不自然に感じられる。

従って終助詞を伴わない文は無標とはいえ、終助詞が欠けていることによって、「聞き手の意向の有無とは没交渉的な強い宣言的な文」¹¹ というニュアンスが付与されることも多い。

『遠くの声を捜して』では主人公恒夫に、ある時から見知らぬ女の声が届くようになる。恒夫はその声だけの女と会話を重ね、かつてアメリカに滞在していた時にエリックという人物と関わって体験した、忘れてしまいたい出来事を記憶に蘇らせていく。

(24)「あんたは女じゃない。はじめから、なにか変だと思っていた。生身の女の匂いがない。手の込んだ脅し方をしてくれるじゃないか。時差か。時差でヒントを与えてくれたってわけか。楽しんでいるじゃないか、エリック。そうとも、あんたはエリックだ。人の頭に入り込んで、今更なにをしようというんだ？ 出てってくれ。あれは俺のせいではない。あんたと奴等の行き違いだ。俺がなにもしなかったとはいわない。しかし、仕向けたのは、あんただ。追いつめたのは、あんただろうが」(72頁)

»Du bist keine Frau. Ich wusste von Anfang an, dass mit dir etwas nicht stimmt. Du hast dir eine ziemlich raffinierte Methode ausgedacht, mich in Angst zu versetzen. Der Zeitunterschied, oder? Das war der Hinweis. Amüsiert dich gut auf meine Kosten, Eric? Du bist es doch, Eric. Was bezweckst du, wenn du dich nach all den Jahren in meinen Kopf schleichst? Verschwinde. Es war nicht meine Schuld. Es war ein Missverständnis zwischen dir und ihnen. Ich behaupte ja nicht, dass ich gar nichts damit zu tun hatte. Aber schließlich hast du mich dazu getrieben.« (S.66)

'You're no woman. I thought there was something strange about you right from the start. You don't have the *scent* of a real woman. I have to say, though, you sure go to great lengths to frighten a person. The time

¹¹ 守屋 (2006a) : A23 頁。また原沢伊都夫は、終助詞に限定されないが、文末にムードを表現する語を欠く文は断定と意志のムードになると述べている(原沢(2012) : 147-150 頁)。

difference, huh? Talking about the time was your way of clueing me in. You're enjoying yourself, Eric, aren't you? Yeah, Eric – it's you all right. What are you trying to do, getting into my head like this, after all this time? Get out. What happened that day wasn't my fault. It was a misunderstanding between you and them. I'm not saying I didn't do anything. But you're the one who made me do what I did. You drove me to it.' (p.63)

(24) は恒夫が「声だけの女」に対して対決的に語る場面である。ここでは終助詞「ね」や「よ」が一度も使われていない。かろうじて、「か」や「が」といった別の終助詞や、「そうとも」の使用で、相手に語りかけているのは伝わるが、聞き手の反応など意に介さない一方的な宣言的調子である。それに対応するように、ドイツ語訳にも心態詞の使用が少ない。英語訳にも同様に話し手の気持ちを表すことばはほとんど使われていない。

(25) 「私ハスグウシロニイマス」 / 振りかえったが、なにも見えない。動けない。「何故こんなことをする？」 / 女の手が恒夫の右腕を掴んだ。 / 「私ハココニイマス」 / 「しかし見えない」 / 「デモ、イマス。アナタノ手ヲ握ッテイマス。」 / 腕を握った手とは別の手が、恒夫の左手を強く握った。 / 「どうして見せない？」 / 「アナタニハ耐エラレナイカラ」 / 「俺は子供じゃあない」 / 恒夫は首を振って、目の闇を払い落そうとした。 / 「昨夜、私ハアナタニ心ヲ開イタ」 / 「なにも聞こえなかった」 / 「デモ、私ハアナタニ心を開イタ」 / 「ただ訳の分らない風が吹いて、訳の分らない気分がたちこめただけだ」 (182-183 頁)

Ich bin direkt hinter dir. / Tsuneo dreht seinen Kopf, aber er konnte nichts sehen, konnte sich nicht mehr bewegen. / »Warum tust du das?« / Die Hand der Frau berührte seinen rechten Arm. / Hier bin ich. / »Aber ich kann dich nicht sehen.« / Aber ich bin da. Ich nehme jetzt deine Hand. / Die Frau ergriff seine linke Hand. / »Warum darf ich dich nicht sehen?« / Weil du es nicht ertragen könntest. / »Ich bin kein Kind mehr.« / Tsuneo schüttelte den Kopf, um die Dunkelheit zu verscheuchen. / Gestern Abend habe ich dir

mein Herz geöffnet. / »Ich habe nichts gehört.« / Aber ich habe es getan. /
»Da war dieser seltsame Wind, und ich fühle etwas, das ich nicht begreifen
konnte.« (S.161f.)

'I'm right behind you.' / He turned his head, but he couldn't see a thing. He
couldn't move. / 'Why are you doing this?' / The woman's hand grabbed
Tsuneco's right arm. / *'I'm here.'* / 'But I can't see you.' / *'But I'm here. I'm*
holding your hand.' / Another hand, different from the one on his arm,
twined itself around his. / 'Why won't you let me see you?' / *'Because you*
aren't strong enough to bear it.' / 'I'm not a child.' / Tsuneco shook his head,
trying to free himself from the darkness. / *'Last night, I opened my heart to*
you.' / 'I didn't hear you say anything.' / *'All the same. I opened my heart to*
you.' / 'A wind was blowing, and I felt something, but it made no sense.'
(p.160)

(25) は、恒夫が「声だけの女」と実際に会おうとしてうまくいかない場面
での会話である。ここにも終助詞はほとんど使われておらず、両者が共同で
話していない感じがよく伝わってくる。ドイツ語訳、英語訳にも、心態詞な
どが表れておらず、表現に素気なさがうかがわれる。

4. 終助詞の人物像造形機能について---『飛ぶ夢をしばらく見ない』の睦子 と妻の口調の対比を例に

次に、終助詞がもつ人物像造形機能について話を進めたい。2.2.で終助詞
「よ」について述べた際に、終助詞の使い方によって口調の雰囲気が変わる
ことに触れた。つまりどのような終助詞を多用させるかで、作中人物のキャ
ラクターを作りあげていく効果が期待できるのである。日本語は「男ことば」、
「女ことば」という概念の存在からもうかがわれるように性別による言葉遣
いの差が大きな言語であり、この言語上の性差に関して終助詞の果たす役割
は大きい。女性が多用する（とされる）終助詞（「の」「わ」など）と、男性
が多用する（とされる）終助詞（「ぜ」「ぞ」など）がそれぞれ存在する。さ
らに「わしは～じゃ」という実際には存在しない「博士語」などというもの

があったり、「～するぜ」などの言い回しで特定の人物イメージが湧くなどということがある。¹²

『飛ぶ夢をしばらく見ない』では、疲れた中年男性の主人公がけがで入院中に睦子という女性と知り合い、二人は退院後に再会して次第に関係を深めていく。その睦子という、主人公が魅惑されていく女性のキャラクターは、「の」という終助詞を多用する話し方で際立たせられている。

- (26) 「あせってしまうのね。いろいろな人生を味わいたくて。私の六十七年なんて、やらなかったことばかり。短い間にとり戻したいと思ってしまうの。なにを^もしていても、こんなことを^もしていいの^もかって気があせるの。いくらも時間がないの」(164 頁)

»Ich fühle mich gehetzt, weil ich noch so viel ausprobieren möchte. Trotz meiner siebenundsechzig Jahre habe ich nie wirklich gelebt. Also will ich alles nachholen. Doch bei dem, was ich tue, frage ich mich, ob mir überhaupt genug Zeit dafür bleibt. Viel kann es nicht mehr sein.« (S.129)

'I guess I became impatient. Wanting to experience all kinds of things in life. There are so many things I've never done in all my sixty-years and now I have such a short time to experience all I can. No matter what I'm doing, I worry that I should be doing something better, more important. Because I really don't have much time at all.' (pp.109-110)

- (27) 「そうなの。手を見ると、変に若いでしょう。ふっくらしているの。しみもないの。胸も白くて大きくて。髪に手をやると、薄くなっていたのが手応えがちがうの。かき寄せるようにして、目の前でかざしてみると黒いの。気が変になったか、死んじゃったのかと思ったわ。別の世界にいるのかなって」(170 頁)

»Ja. Ich hielt mir die Hände vor das Gesicht, sie sahen unfassbar jung aus. Sie waren rundlich und glatt, keine Altersflecken mehr. Der Busen war

¹² 参照：金水敏（2003），中村桃子（2013），秋月高太郎（2013）など。

fällig, die Haut hell und glatt. Mein dünnes Haar fühlte sich dichter an. Als ich mir eine Strähne vor die Augen hielt, war es wieder ganz schwarz. Ich glaubte, ich sei verrückt geworden oder sogar schon tot - in einer anderen Welt.« (S.134f.)

'That's right. When I looked at my hands there were surprisingly young. They were plump, not bony, and all my old blotches were gone. My breasts were big and white. And when I touched my hair, which had been thinning, I noticed it was thicker. I brushed my hair over my eyes and found that it was black. At that moment, I thought I'd either gone mad or had died. That I was in another world.' (p.114)

(26) と (27) は睦子のせりふだが、多くの文が「の」で終わっている。(27) で一回使用されている「わ」同様、「の」は女性や子どもが使用するイメージの強い終助詞である。幼さや弱さと結びつき、守ってやらなければと聞き手に思わせる話し方である。一方以下に示す (28) に見られるように、関係が冷え切っている妻のせりふには、終助詞「の」はほとんど出てこない。しかし、ドイツ語に終助詞は存在しないので、二人の女性の口調の違いをそのまま訳出するのは困難である。(26) と (27) のドイツ語訳や英語訳に「の」を伴う口調のニュアンスは特に感じられない。それでも、ドイツ語で読んでも、睦子と妻のキャラクターの違いが作品全体からは伝わってくるのは、以下の (28) ~ (32) の訳例に見られるように、せりふ以外の人物描写がしっかりと訳されているためだろう。

(28) 妻はしかし固い口調を変えなかった。/「矢継ぎ早にいろいろのうもあれだから、このくらいにしておきますけど」/「いいよ。なんでもいってくれ。かえって気になる」/「裁判でああいった以上、手続きは二年後にしても、別れるということを考えていますから」/「ああ」と私はいった。/当然という気がした。(272 頁)

»Ich denke, für heute sollten wir es bei dem belassen ...«, meinte meine Frau in angespanntem Ton. / »Nein, nein. Sag, was du auf dem Herzen hast.

Alles andere macht mich nur nervös.« / »Ich habe vor Gericht versprochen, mich um dich zu kümmern, also bleibe ich die zwei Jahre bei dir. Danach möchte ich die Scheidung.« / Ich willigte ein. Ich hatte damit gerechnet. (S.209f.)

As for my wife, her tone remained unfailingly harsh. / 'I'm going to leave it at that for now,' she said, 'because I don't want to bombard you with one thing after the other.' / 'It's okay. Say whatever you need to. It'll only bother me if things are left unsaid.' / 'After what I said in court, I will have to wait two years before doing the paperwork. But once that's passed, I'm planning to leave you.' / 'I understand.' I thought that it was only natural. (p.183)

- (29) それから睦子は、はにかんだ。それは、いまの娘たちからほとんど失われている、演技の匂いのない、自然なはにかみだった。/甘くとろけるような灯りが、小さくともったようであった。(125頁)

Offenbar genierte sie sich. Ihre Schamhaftigkeit wirkte nicht gekünstelt, die Sache schien ihr wahrhaft peinlich zu sein. Sie zeigte dabei jedoch eine Natürlichkeit, die die jungen Frauen von heute vermissen lassen. / Es war, als wäre sie von einem lieblichen, weichen Leuchten umgeben. (S.100)

'Well --' She gave a shy smile. It was a perfectly natural shy smile, without a hint of pretence. A smile you never see on the faces of most young women these days. It made me feel like a sweet, warming flame had been lit in my heart. (p.83)

- (30) しかし睦子の目には悲哀のようなものがあり、見る見る涙が光った。
(129頁)

Doch in Mutsukos Augen stand Traurigkeit, sie glänzten vor Tränen. (S.102)

I sensed sadness in her eyes, which soon sparkled with tears. (p.85)

(31) 「なんだと思う？」 / 睦子はちょっといたづらをはじめるように微笑した。(175-176 頁)

»Was glaubst du, was das ist?«, fragte sie und lächelte schelmisch. (S.140)

‘What do you think it is?’ She gave me a teasing smile. (p.118)

(32) 返事は大人びていたが、やることはとても六十七歳を経験した女とは思えない。バカにしているのではなく、可愛いような気がするし、こういうところがあるからこそ強盗恐喝などということを思いつくのだし、それにしても老婆であった時の睦子だったら、そんなことを思いつきもしなかったにちがいないのだから、若くなってその若さに実に早く適応しているという気がした。(182 頁)

Es klang erwachsen, aber sie benahm sich nicht so, wie man es von einer siebenundsechzigjährigen Frau erwartet hätte. Ich meine das nicht abschätzig. Ich fand es sogar liebeswert. Aber auf die Idee eines Raubüberfalls wäre Mutsuko sicher nie gekommen, als sie noch eine ältere Dame war. Anscheinend passte sie sich an ihr neues Alter besser an, als es mir aufgefallen war. (S.144)

Her response sounded very mature, but her actions didn't seem fitting for someone with sixty-seven years of life experience. Don't get me wrong, though – I don't mean that in a nasty way. In fact, I found it quite endearing. It's just that she would have never acted in such a way when she was an old woman. She certainly wouldn't have considered armed robbery. I guessed she must have been adapting to her new youth more adeptly than I'd realized. (p.123)

(28) ~ (32) の訳例でよく見て取れるように、睦子と妻それぞれのキャラクターは、地の文で詳細に描写されているので、そこを遺漏なく訳すことで、それぞれの人物像の特徴は読み手にじゅうぶん伝わってくる。

5. まとめと考察

以上、山田太一のファンタジー三部作をそのドイツ語訳と対照させることにより、日本語の終助詞が、終助詞に直接対応する語を持たないドイツ語にどのように訳されているのかを見てきた。日本語の終助詞の機能をドイツ語訳を通して逆照射することにもなったと思う。いま一度振り返り簡潔にまとめておきたい。

はじめに、『異人たちとの夏』の親子の会話を例に、共同注意の観点から終助詞「ね」と「よ」の訳し方を調べた。「ね」は共同注意を求めたり、共同注意を確認したりする終助詞である。ドイツ語訳ではそのような働きを、a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる、b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む、¹³ c) 共同注意態勢にあることを明確に示す文言を用いる、といった手段でしばしば代替させていることが確認された。「よ」の方は、a) 表現を強める語（心態詞など）を用いる、b) 主語を wir にすることで聞き手を巻き込む、c) 命令文にする、といった手段で対応されている。また、英語訳では「ね」「よ」で終わる発話がしばしば、I think/ I guess/ you know などを用いて訳されるのに対し、ドイツ語訳では ich glaube や weißt du was? などがあまり使われていないこともわかった。

¹³ 当初筆者は「ね」について「二人称代名詞の使用によって聞き手を巻き込む」という対応もあるかと考えていた。例えば「身体を大事にね」（原作 173 頁）のドイツ語訳は »Pass gut auf dich auf.« (S.152)、英語訳は “Take good care of yourself.” (p.164)となっている。この訳例を手がかりに、日本語では会話中に二人称代名詞を使うことは稀で、聞き手に言及するのにできる限り他の手段を用いようとする傾向があるが、終助詞「ね」にはそのような、聞き手を名指しすることを避けつつ聞き手に言及する機能が認められるのではないかと、つまり二人称代名詞の機能の一部を代替するような働きがあるのではと考えた。日本語の会話においてはなるべく使用が差し控えられる二人称代名詞であるが、それがドイツ語の会話中で持つ機能が、日本語における終助詞の働きとどこかしら重なるところがあるのではないかと、また会話の中で聞き手の名前（英語の dear 等の呼びかけも含め）を頻繁に呼びかけるかどうか、共同注意を求めたり促したりという終助詞の機能と関わるのではないかと、というのが口頭発表時、および論文投稿時の筆者の考えだった。しかし、査読者の方々の指摘を受け、再考を重ねたところ、wir という一人称複数の代名詞で聞き手を巻き込むことは可能だが、二人称代名詞や聞き手の名前を会話中に出すことは、共同注意との関連の深い「間主観性」からは逆に離れる方向性をもつのではと考え直すに至り、本稿の「2. 「共同注意」の観点から終助詞「ね」と「よ」の訳し方について---『異人たちとの夏』の親子の会話を例に」の項目には大幅な修正を加えた。査読者の方々にはこの場を借りて感謝を申し上げたい。

次に、『遠くの声を捜して』の対話を例に、終助詞を欠く表現が持つニュアンスについて考えてみた。日本語の日常会話は、話し手と聞き手が共同で話す傾向が大変強く、「ね」や「よ」を伴わない言い方は不自然に感じられるほどである。終助詞を欠いた場合、その文は聞き手の意向の有無とは没交渉的な強い宣言的な調子を帯びることも多い。そのような文では、ドイツ語訳に上に記したような代替手段が出現しない。このことは上述の諸手段が、共同注意を求めたり促したりする終助詞に対応した働きをしていること、つまり代替手段として適切であるとの主張を裏から補強してくれるだろう。

そして三番目として、『飛ぶ夢をしばらく見ない』のヒロイン睦子と妻の口調の対比を例に、終助詞の人物像造形機能とそれを翻訳する際の問題点について探ってみた。日本語による文学作品では、登場人物のキャラクターを明確化させる手段として終助詞が駆使されることがよくあるが、ドイツ語には終助詞にそのまま対応する語がないので、翻訳の際には、せりふではなく地の文で為されている人物描写を確実に訳すことで対応することになる。

筆者は数年前から日本語による文学作品のドイツ語訳を手がかりに、日独両言語の発想の相違やそれぞれの言語が得意とする表現に焦点を当てて研究を進めてきた。今回は終助詞というそもそもドイツ語には存在しない品詞に注目して、山田太一の小説を素材に考察を試みた。その結果、終助詞がもたらすニュアンスを表現するのに翻訳上さまざまな工夫が為されていることがわかった。何より ja や doch 等の心態詞の利用が目を引く。原作で終助詞が使われていない箇所では、ドイツ語訳においても心態詞の使用が少ない。一方で意外だったのは、和独辞書や独作文の解説書で、「ね」にあたるドイツ語として紹介されている nicht wahr? や oder? が「ね」の訳としてはほとんど使われていないことであった。nicht wahr? などは、終助詞「ね」よりももっと相手の同意を取りつけるようなニュアンスが強いのではないだろうか。¹⁴ 文単位では翻訳できなくても、作品全体として何らかの別の手段で表現内容が移されていると、今回とりわけ強く感じたのは、そもそも終助詞

¹⁴ あるいはその使用頻度の高低は、言語ごとの「共同で話す」傾向の強弱に由来しているのかもしれない。原沢伊都夫は、「英語の話者は日本人ほど頻繁には付加疑問文を使いません。でも、ブラジル人は本当によく使わうです。」と述べている（原沢（2012）：163頁）。

というものがドイツ語に存在しないためかもしれない。

使用テキスト

山田太一『飛ぶ夢をしばらく見ない』小学館文庫，2013年。

Taichi Yamada: *Lange habe ich nicht vom Fliegen geträumt*. Aus dem Japanischen von Ursula Gräfe und Kimiko Nakayama-Ziegler, München (Goldmann), 2008.

Taichi Yamada: *I haven't dreamed of flying for a while*. Translated by David James Karashima, London (Faber and Faber), 2008.

山田太一『異人たちとの夏』新潮文庫，2013年（19刷）。

Taichi Yamada: *Sommer mit Fremden*. Aus dem Japanischen von Ursula Gräfe und Kimiko Nakayama-Ziegler, München (Goldmann), 2007.

Taichi Yamada: *Strangers*. Translated by Wayne P. Lammers, London (Faber and Faber), 2005.

山田太一『遠くの声を探して』新潮文庫，1992年。

Taichi Yamada: *Auf der Suche nach einer fernen Stimme*. Aus dem Japanischen von Ursula Gräfe und Kimiko Nakayama-Ziegler, München (Goldmann), 2010.

Taichi Yamada: *In search of a distant voice*. Translated by Michael Emmerich, London (Faber and Faber), 2006.

参考文献

秋月高太郎（2013）：「続・ウルトラマンの言語学」、『尚絅学院大学紀要』第65号，22－42頁。

池上嘉彦/守屋三千代（2009）：『自然な日本語を教えるために：認知言語学をふまえて』ひつじ書房。

大藪正彦（2012）：「翻訳と聞き手・読み手の視点：共同注意を軸とした日独

- 語対照研究」, 竹内義晴 (編) 『翻訳という問題から見えてくる言語, 文化, 人間』, 日本独文学会研究叢書, 第 85 号, 40-56 頁.
- 金水敏 (2003): 『くもっと知りたい! 日本語〉ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店.
- 近藤安月子/姫野伴子 (2012): 『日本語文法の論点 43: 「日本語らしさ」のナゾが氷解する』研究社.
- 三枝令子/中西久美子 (2003): 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現: モダリティ・終助詞』スリーエーネットワーク.
- 清野智昭/山田敏弘 (2011): 『日本語から考える! ドイツ語の表現』白水社.
- 中村純子 (2000): 「終助詞における男性語と女性語」, 『信州大学留学生センター紀要』第 1 号, 1-14 頁.
- 中村桃子 (2013): 『翻訳がつくる日本語: ヒロインは「女ことば」を話し続ける』白澤社.
- 原沢伊都夫 (2012): 『日本人のための日本語文法入門』講談社現代新書.
- 福島和郎/岩崎庸男/渋谷昌三 (2006): 「終助詞「よ」と「ね」に関する研究の動向」, 『目白大学心理学研究』第 2 号, 65-74 頁.
- 松村瑞子 (2001): 「日本語の会話に見られる男女差」, 『比較社会文化: 九州大学大学院比較社会文化学府紀要』第 7 号, 69-75 頁.
- 守屋三千代 (2006a): 「日本語の終助詞使用: 日英対照の観点より」, 創価大学『日本語日本文学』第 16 号, A19-A32 頁.
- 守屋三千代 (2006b): 「〈共同注意〉と終助詞使用」, 『言語』2006 年 5 月号, 20-27 頁.
- 山田敏弘 (2009): 『日本語のしくみ』白水社.

Wie übersetzt man japanische Satzendpartikel ins Deutsche?
— Anhand einer Gegenüberstellung von Yamada Taichis phantastischer
Trilogie mit der deutschen Übersetzung —

MIYAUCHI, Nobuko

In japanischen Alltagsgesprächen ist es normalerweise nötig, Sätze mit Satzendpartikeln zu schließen. Sonst klingen Gespräche in vielen Fällen unnatürlich. Denn für Gespräche in japanischer Sprache ist der Begriff „gemeinsame Aufmerksamkeit“ (joint attention) sehr wichtig. Man sagt oft, Japaner sprechen kooperativ. Dazu tragen Satzendpartikeln wie NE, YO und andere bei.

Der vorliegende Beitrag behandelt, wie die Ausdrücke mit Satzendpartikeln in Yamada Taichis phantastischer Trilogie („Lange habe ich nicht vom Fliegen geträumt“, „Sommer mit Fremden“ und „Auf der Suche nach einer fernen Stimme“) ins Deutsche übersetzt wurden.

Zuerst wurde untersucht, wie die Ausdrücke mit den Satzendpartikeln NE und YO im Gespräch zwischen den Eltern und ihrem Sohn in „Sommer mit Fremden“ übersetzt wurden. Weil es im Deutschen weder eine Entsprechung zu NE noch zu YO sondern überhaupt keine Satzendpartikel gibt, wurden Formulierungen mit solchen Satzendpartikeln von Fall zu Fall anders übersetzt. Das Ergebnis der Untersuchung, wie sie übersetzt wurden, ist folgendes:

1. die Ausdrücke mit dem Satzendpartikel NE
 - a) durch Modalpartikel wie doch, ja und andere
 - b) durch „wir“ als Subjekt
 - c) durch die klare Schilderung der gemeinsamen Aufmerksamkeit auf den Hörer
2. die Ausdrücke mit dem Satzendpartikel YO
 - a) durch Modalpartikel wie doch, ja und andere

- b) durch „wir“ als Subjekt
- c) durch den Imperativ

In „Auf der Suche nach einer fernen Stimme“ finden sich einige Gespräche, in denen Satzendpartikeln fehlen. Wie oben gesagt, gibt es im Japanischen eine starke Tendenz, kooperativ zu sprechen. Daher klingt ein Satz ohne Satzendpartikel oft unnatürlich. In solchen Sätzen erkennt man etwas Apodiktisches wie ein Manifest. In der deutschen Übersetzung solcher Sätze finden sich aber keine der oben erwähnten Ersatzlösungen. Das kann auch ein Beweis dafür sein, dass diese Ersatzlösungen der richtige Weg sind, um „gemeinsame Aufmerksamkeit“ auszudrücken.

In „Lange habe ich nicht vom Fliegen geträumt“ wurde eine Funktion der Satzendpartikel, durch die man Personen charakterisieren kann, untersucht. Japanische Schriftsteller benutzen diese Funktion oft, weil es im Japanischen spezielle Satzendpartikel für Frauen (z.B. NO und WA), für Männer (z.B. ZE und ZO) oder auch für ältere Menschen usw. gibt. Mutsuko, die Protagonistin dieser Novelle, spricht oft Sätze mit dem Satzendpartikel NO, die schwach, niedlich bzw. kindisch klingen. Die selbständige Ehefrau des Protagonisten spricht dagegen nie diesen Satzendpartikel NO aus. Es ist zwar schwierig, den Unterschied in der Sprechweise dieser zwei Frauen direkt ins Deutsche zu übertragen. Die Leser der deutschen Übersetzung können jedoch den Unterschied verstehen, wenn die Beschreibungen der beiden Frauen sorgfältig übersetzt wurden.